ドラえもん のび太のバイオハザード　イレギュラーな者たち

ゼクセル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ドラえもん　のび太のバイオハザード　　イレギュラーな者たち

【Ｎコード】
Ｎ９６５２Ｙ

【作者名】
ゼクセル

【あらすじ】
突然現れた黒いコートの男を追いかけたら、異世界へと飛んでしまった星也。しかし、運悪くゾンビだらけの街にきてしまったのだった。果たして星也はこの街を脱出することが出来るのか！？ちなみに、この作品は僕のデビュー作です。そして、文才０です。超駄文です。だから、暇で死んでしまうというときにでも読んでいただけたら光栄です。あと、この作品はマイナーなもの、メジャーなものがコラボするかもしれません。コラボすると超駄文がさらに酷くなる可能性大です。その時はなるべく温かい目で見てください。

第1話　異世界（前書き）

初投稿です。よろしくお願いします。

第1話　異世界

皆さん、こんにちは。僕の名前は才川星也です。まぁ、自己紹介はこれくらいにさせてもらいます。え、なぜかって？なぜなら、現在暴徒化した民間人に追いかけられていますから。まるでホラー映画やホラーゲームにでてきそうなものです。そもそも、なぜこうなってしまったのでしょうか？少し時間をさかのぼって見ましょう。

確か、僕は夏なのに真っ黒なコートを着ている男を怪しいと思い追いかけてました。そして、その後その男は……そうだ！黒い渦を空間に作り出してその中に入っていったんだ！僕はその中に興味本位で入って……気がついたら此処にいたんでした。それで、あの暴徒化した民間人が出てきて襲いかかってきたから逃げて……現在に至ります。

星也「畜生――！どうなってるんだこの街――――――！？」

星也は声が街中に響いた気がした。

第1話　異世界（後書き）

意見、感想お待ちしています！

第2話　倉庫（前書き）

今回もよろしくお願いします。星也の能力がほんの少し出てきます。

第2話　倉庫

ずっと逃げてるのが嫌になった星也は倉庫らしきところへ隠れるようにして入った。
星也「とりあえず必要になりそうなものを探しましょう。」
星也は倉庫の探を始めた。すると、
星也「これは…ハンドガン！？しかも外国産のブラックテイルだ。どうしてこういったものが…？」
星也は日本にあるはずのない外国産の銃を見つけ、驚いている。なぜあるのか疑問に思ったが、
星也「ま、いいか。この状況では持っていたほうがいい気がします。」星也はとりあえずハンドガンのことについて考えるのをやめた。
　結局、その後はハンドガンの弾、非常食くもちろんのこと、ゾンビ（今の星也にとっての暴徒化した民間人）のお出迎えである。
星也「人は殺したくないが…仕方がない！正当防衛です！」
そう言ってどこから出したのか手には刃のついた銀と赤色のチャクラムが握られていた。そして、星也はそれを持ってゾンビ達にむかっていくのであった。

第2話　倉庫（後書き）

次回は星也のプロフィールです。引き続き意見、感想お待ちしています。

主人公紹介（前書き）

星也のプロフィールです。少し修正しました。

主人公紹介

才川（さいかわ）　星也（せいや）

身長　１７２ｃｍ
体重　５５ｋｇ
年齢　１６歳
性別　男
性格　・冷静
　　・照れ屋
　　・他人第一
　　・時々腹黒い
誕生日　１２月２５日
好きなもの
　・アイスクリーム
・お菓子（主にチョコやキャラメルといった甘いもの）
・天体観測
・他人を大事にする人
・努力する人

嫌いなもの
・生クリーム
・なすび
・ぎんなん
・他人を大事にしない人

外見　デュララララ！！にでてくる紀田正臣を赤髪、赤目にした感じ

この作品の主人公。常に冷静沈着で仲間思いだが他人を大事にしない者だと相手をゴミと同じような扱いになる。ある事情で０～６歳の記憶を失っている。恋愛にとても鈍感。
身軽で味方も敵み翻弄する動きが得意。近接系の武器ならなんでも使える。

能力
・自由にチャクラム（キングダムハーツ？のアクセルと同じもの）を出したり、消せたりできる。

もう一つ能力があるがまだストーリーにでてきていないため秘密です。

主人公紹介（後書き）

引き続き意見、感想お待ちしております。

第3話　野比のび太（前書き）

原作主人公登場です。そして、オマケ…やっちゃいました。ま、そういうキャラにする方針なのでお許しを。

第3話　野比のび太

５分後１０体くらいいたゾンビを一掃していた。
星也「なんか…肉が腐ってる？本当に生きている人間だったのか…」
星也はゾンビの死体を見て思った。…てか今更？
星也「……どこに行けばいいのだろうか？」
星也はどうするか考えた。そして、１つの結論にたどり着いた。
星也「……避難所を探そう。」
そう言ったのはいいがどこに行けばいいか分からない星也。迷ったそのとき、
　ギィィィィ
後ろの倉庫の扉が開いた音がした。星也は軽く跳び、倉庫の扉と距離をとった。しかし、いたのはゾンビではなく
星也「…生存者か。」
そう言ってチャクラムを下げ、消した。
？「生存者ですか。あの…一緒に行動しませんか？」
頼んできたのは黄色の服を着ていてメガネをかけた小学生くらいの男の子だ。
星也「別に構いません。ところで、どこへ行こうとしていたのですか？」
？「（年下に敬語？）えっと…避難所になっている小学校です。」
その言葉を聞いてラッキーと星也は思った。避難所を探す問題が解決できたからだ。
星也「分かりました。では同行させてもらいます。」
星也はそう言った。
？「あの…お名前は？」
星也「僕？僕は才川星也。星也と呼んで貰えたら光栄です。」
？「僕の名前は野比のび太です。」
お互いの自己紹介が終わり、小学校へ歩いていった。

オマケ

あれ、ここどこ？どうしてこんな火事になってる家の前で寝ていた？なんだあれ？ええ！？ゾンビ！？

な、なんで現実に！？わ、わぁ！カ、カラスまで！？と、とにかく逃げよう。あと、言っておくことが、

「上から来るぞ！きをつけろ！」

そう言って俺は走った。風となって……

第3話　野比のび太（後書き）

次回オリキャラ一人、コンピューターゲーム『怪異症候群』から一人出します。『怪異症候群』が分からない方は少し調べてみてください。

第４話　生存者（前書き）

あとがきのほうで何かやろうかな？

第４話　生存者

学校に入った星也とのび太。

のび太「どうします？」

星也「まず近くの部屋から入って行きましょう。」

そう言って星也は生徒玄関から一番近い「保健室」の扉へと手をのばす。

ガラッ

？「だ、誰だ！？」

星也が扉を開けると中にいたオレンジ色の服を着たゴリラみたいな男の子が金属バットをこっちに向けてきた。

星也「落ち着いてください。僕たちは生存者です。」

？「…そうみたいだな。悪かったな。」

星也がゴリラみたいな子にそう言うとその子は金属バットを下げ、納得してくれた。その間にのび太が保健室に入っていた。

のび太「ジャイアン！それにみんなも！」

？「のび太さん、無事だったのね。」

？「のろまなお前がよく生きてたな。」

のび太「　……この人達は？」

ジャイアン「とりあえず、ここに避難してきた人達だ。」

のび太は友達と会えて安心の表情を見せた。ジャイアンはここにいる人はみんな避難してきた人だと言った。星也はそののび太達のやりとりの間に生存者の数を数えつつ、どんなような人か把握していた。

星也（小学生が５人、中学生が１人、同じ年齢の女性が２人、５０代の大人１人、自分を含め１０人か。ん、待てよ、さっきいたのって…）

星也が生存者を数え終わったところでふとある人のことを考えた。

そのときに、

？「……もしかして、星也君？」

星也「美琴さん？」

美琴「やっぱり、星也君だ！」

美琴は星也と会えて飛んで喜んだ。

ジャイアン「２人知り合いですか？」

星也「はい。同居している人です。」

のび太「同居？」

星也「はい。美琴さんはある事件をきっかけに1人になってしまったんです。僕は1人暮らしだったので、部屋を貸してあげてるんです。」

星也がそう説明するとその場にいる全員が納得した。

星也「あ、紹介が遅れました。僕は才川星也です。星也と呼んで貰いたい。」

？「私は源静香よ。この学校の6年生です。」

？「僕は骨川スネ夫。」

ジャイアン「俺は剛田武。みんなからはジャイアンってよばれている。」

のび太「僕は野比のび太です。」

？「僕の名前は出木杉英才です。彼らと同じ6年生です。」

？「……中二の白峰。」

？「私は桜井咲夜よ。よろしくね。星也君。」

？「私は町内会長の金田正宗様だ。」

星也（なんだ？この人？）

けっこうシリアスな感じでみんな自己紹介をした。そして、ジャイアンが何か言おうとしたときに、

？「なんだ！？この学校は！？」

という声が聞こえた。なんだ！？と言われてもただの学校です。

？「せっかくだから俺はこの赤い扉を選ぶぜ。」

その声が星也達がいる保健室前から聞こえた。みなさんもう分かりますよね。前回オマケに出ていた彼です。

星也（あいつもきてたのか。）

星也はもう誰か分かったようだ。

？「ジャジャーン」

ガスッ

？「うげぇっ。」

謎の男がいきなり効果音をつけ、入ってきた。入った途端に星也に蹴られた。

星也「誰もいなかったら、やりたい放題ですね、秀人。」

秀人「だからっていきなり蹴ることないじゃん。」

星也「見苦しかったのでつい…」

星也と秀人がそういうやりとりをしてると、
出木杉「知り合いですか？」
出木杉は星也に質問した。
秀人「わたしか？わたしは中村秀人。探偵さ。」
星也「彼は中村秀人。」
秀人「そして、またの名をモンキー・D・ヒデト。」
星也「厨二病末期の患者です。」
やりたい放題の秀人をスルーして秀人を紹介する星也でした。

第４話　生存者（後書き）

すみません。分からないネタばかりですよね。意見、感想お待ちしております。

第5話　アビリティー（前書き）

今回は分かりづらいです。すみません。

第5話　アビリティー

秀人含めみんなの自己紹介が終わった。

秀人「つーかさ星也、わたしの紹介酷くない？厨二病末期の患者とか…」

星也「事実じゃないですか。」

秀人「そんでもひでーよ。」

秀人は星也に自分の紹介が酷いと言うが星也は事実と言い返す。さっきから美琴の顔が赤い。それに気づいた星也は、

星也「美琴さん、大丈夫ですか？顔赤いですよ？」

美琴「え？あ…だ、大丈夫。」

星也は美琴に質問をした。美琴はそれに大丈夫と答えるがまだ顔が赤かった。いや、さっきよりも顔が赤くなっていた。

秀人「…美琴、星也、ちょっとついてきてくれ。」

出木杉「どこに行くのですか？」

秀人「トイレ。お前らはトイレの扉の前で待っててくれ。」

星也「分かりました。」

美琴「いいわよ。」

秀人がトイレへ行くと言って星也と美琴にトイレの前で待ってもらうよう頼んだ。星也と美琴はすぐに承諾した。しかし、秀人は保健室を出るとトイレへ行かず空き教室に入った。星也と美琴はついていったが美琴はなぜだか分かっていなかった。星也は分かったようだった。

秀人「…おい、この状況どう思う？」

美琴「え？街の人達がゾンビになって襲いかかってきてるのじゃあ…」

星也「え？ゾンビだったのですか？やっぱりあれ？良かった。てっきり人を殺してしまったかと…」

秀人「お前…やっぱり鈍感だな。いや、わたしが言いたいのはそんなことじゃない。」

星也「…なんで『ドラえもん』の世界の星に来たか…ですよね、秀人が言いたいのは。」

美琴「？」

秀人が聞きたいことを星也が代弁した。美琴は全く分からないようだ。

秀人「星也！？気づいていたのか！？」

星也「気づくもなにもそうとしか考えられないじゃないですか。「ススキヶ原」という地名、「野比のび太」とその仲間達４人、それ

らを考えたらそうとしか考えられないですよ。」

星也が根拠となることがらを述べ、説明する。

美琴「ち、ちょっと待ってよ星也君。いくら何でもアニメの世界は有り得ないよ。」

星也「…パラレルワールドって知ってます？美琴さん。」

美琴「え？平行世界って意味じゃあ…」

星也「そう。言い方を変えたら「もしも」の世界です。「もしも」っていうことはいろんな可能性が無限大にあります。先ほどでた星の話も同じようなものです。一つ一つの星にそれぞれの世界が無限大にあります。僕たちのいた世界もその中の一つです。そして、この世界も例外ではありません。それはアニメがどうとかの話ではありません。実際に存在していますから。」

美琴は秀人と星也の考えを否定していたが星也の説明を聞いて信じれないが納得した。

秀人「問題はなんでこっちの世界に来たか…だな。」

美琴「どういうこと？」

星也「確かに星一つ一つにいろんな世界があるけど、普通では自分達以外の世界に移り住むとか干渉はできないんです。」

秀人が提示した問題に美琴は質問した。星也はその質問に答え、美琴は納得した表情だった。

美琴「じゃあどうしてこっちの世界にきたの？」

秀人「きたんじゃない。誰かにつれてこられた。」

美琴「どういうこと？」

秀人「こっちの世界にくる前に白い空間に包まれたのが記憶にある。そんなの怪奇現象でも聞いたことがない。そう考えると誰かの力によってつれて来られたという線が妥当だ。」

美琴「そう言えば私も…」

星也「僕は君たちと違うけど、誰かの力によってつれて来られたのは確かみたいですね。」

秀人は自分達がこっちの世界に来たのは誰かの力のせいだと考えた。その考えに星也と美琴は賛同した。

美琴「でも、普通なら他の世界に行けないんだよね？そんなことが…」

星也「できます。普通にとらわれない能力「アビリティー」なら。」

美琴「アビリティー？」

星也「美琴でいう「怪奇を感じとる力」と「怪奇の力を弱くする力」、「悪意のない怪奇を味方にする力」のことで僕でいう「チャクラムを自由に出したり、消せたりする力」です。常識じゃあ有り得ない力のことです。」

星也はアビリティーについて美琴に説明した。

秀人「そろそろ戻ろうか。みんな心配するだろうし。」

美琴「あれ？トイレは大丈夫なの？」星也「心配ないでしょう。もとからこの話をするために僕たちをつれて保健室でたんですし。」

美琴「そうなの？秀人君？」

秀人「星也、こんなときには鋭いな。まあ、そうだな。あと、今の話はみんなにするな。今のみんなだと混乱を招くだけだ。」

星也「分かっている。」

美琴「はい。」

こうして、3人は保健室に戻っていった。

オマケ

教室を出た3人。

秀人「ほら、早く行くぞ。」

星也「分かっている。」

美琴「ちょっと待ってよ。…あ！」

秀人の言葉を聞いて急いだ美琴は足を滑らせてしまった。美琴の体が後ろへと倒れていく。美琴は目を瞑った。後ろに倒れるのを覚悟

して。しかし、いつまでたっても床に体があたる感覚がこない。

美琴（あれ？）

おかしいと思った美琴はそーっと目を開ける。すると目の前には星也の顔があった。そして、腕を肩と腰にまわし美琴の体を支えていた。

星也「大丈夫ですか？」

美琴「あ、えっと…／／／だ、大丈夫／／／／」

星也に美琴は大丈夫と言うも顔が真っ赤であった。

星也（顔真っ赤だけど本当に大丈夫か？風邪でもあるんじゃ…）

星也と美琴のやりとりをみていた秀人は鈍感すぎる星也に呆れていた。

秀人（…いいかげん気づけよ。）

それでも美琴が星也のことが好きなことに気づかなかった星也であった。

第5話　アビリティー（後書き）

第１０話からあとがきで何かやります。何かは秘密です。

第6話　行動（前書き）

今回はまだ普通な話です。

第6話　行動

保健室に戻った3人。
ジャイアン「遅かったですね？どうしたんですか？」
秀人「いや、ちょっとゾンビに襲われてな…」
秀人はジャイアンの質問に嘘を言った。
咲夜「災難だったわね。」
星也「はい。」
星也が咲夜の発言に対しそう答える。すると秀人は咲夜のほうへ歩いていった。
秀人「あの…咲夜さん。この状況が終わったら、一緒にお茶でもどうぐふぅ。」
ドゴッ
秀人が咲夜をナンパしようとしたところで星也の鉄拳が秀人の腹に決まる。
星也「それは死亡フラグです。さらにこの状況でのナンパはやめてください。」
星也はそう言いながら秀人の服の襟を掴み、もとの場所へと引きづっていく。

星也「すみません。この人女タラシなんで綺麗な女性を見るとすぐこうなるんですよ。」

咲夜「綺麗な…女性？／／／」

星也の言葉を聞いて咲夜は顔を赤らめた。

星也「それよりどうするのですか？ずっとここにいるわけにもいかないでしょう？。」

出木杉「そのことなんですが、裏山にこもってこの事態の終息を待つことにしました。」

のび太「そこで街にいろいろ取りに行く班と学校の探索班をそれぞれ２つと３つに分けようと思っているのです。」

星也の質問に出木杉とのび太が答えた。

星也「つまり、２人１組ということですね。」

星也がそう訪ねると出木杉がうなずいた。そして、みんなで相談した結果こうなった。

・学校探索班
出木杉，白峰組
咲夜，静香組
星也，のび太組

・必要物資調達班
ジャイアン，スネ夫組

秀人，美琴組

・無職、引きこもり
金田正宗

こんな感じでチームをわけた。

秀人「そう言えば、通信手段はどうするんだ？」

静香「確かにこのままじゃあバラバラになるかもしれませんね。」

星也「携帯電話を使えばいいんじゃないですか？職員室にあるかもしれませんし…」

出木杉「それです！みんなでケータイ使いましょう。」

通信手段をどうするかという問題がでたが、星也の発言によりみんなでケータイを使うことにきまった。

星也「じゃあ、僕のアドレス渡しておきます。ケータイを手に入れたら、メールでも電話でもしてください。」

秀人「じゃ、わたしのも。」

美琴「私のも。」

咲夜「私のアドレスよ。」

星也はケータイを手に入れたらすぐ連絡できるようにアドレスを渡

した。ケータイを持っている人も星也と同じようにアドレスを渡した。

星也「それじゃあ、散開です。」

星也がそう言うとそれぞれ行動を開始した。

オマケ

星也「あ、剛田君。何か甘いお菓子あれば持ってきて貰いたいんだけど。」

ジャイアン「なんでですか？」

秀人「こいつは甘党なんだよ。星也曰わく、いつもお菓子を携帯しないと落ち着かないらしいんだ。」

星也「本当にお願いします。」

ジャイアン「わかりました。あったら持ってきます。」

星也「ありがとうございます。」

スネ夫「どんなのがいいの？」

星也「チョコとかキャラメル類ならなんでもいいです。」

スネ夫「わかりました。」

こんな状況でもお菓子が欲しい星也でした。

第6話　行動（後書き）

次回はバイオゲラスの前までいきたいです。そのため、読み物は省略するかもしれません。

第7話　探索【1階】（前書き）

無理矢理です。途中説明だけのところがあります。あとがきであるコーナーを始めました。

第7話　探索【1階】

保健室を出た星也とのび太。

のび太「まずは職員室ですね。」

星也「そうですね。のび太君のケータイを取りに行かなければなりませんから。」

まず職員室に向かった2人。行くときには何も出なかった。しかし、職員室に入ってのび太がケータイを取って、資料室の鍵を取ると、

ガシャーン

窓を割ってゾンビ犬が2体入ってきた。星也はすぐさまチャクラムを出し2体のうちの1体に投げた。ゾンビ犬は首が切断され、絶命した。切断するとチャクラムは星也の手もとに戻ってきた。すぐさま星也は反対を振り向いたがもう1体はのび太がハンドガンで倒していた。

のび太「すごいですね。そんなすぐ倒せるなんて。」

星也「のび太君こそ撃ち抜きのスピードはゴルゴ並みですよ。」

ゾンビ犬を倒した星也とのび太はお互いにほめあった。

のび太「そう言えば、なんで星也さんいつも敬語なんですか?」

星也「昔からのクセ…でしょうか。まあ、そんな感じです。」

のび太の問いに対して星也はそんな風に答えた。2人は職員室を出

て資料室へ向かった。資料室の鍵を開けて部屋を探索した。

星也「……なんで小学校に銃弾があるんでしょうか？しかも手榴弾まで…」

のび太「星也さん、こっち側の探索終わりました。」

星也「分かりました。そちらに行きます。」

星也も探索が終わったのでのび太のほうへ行く。

星也「そちらでは何かありましたか？」

のび太「こっちではグリーンハーブと警備員の心得がありました。」

星也「警備員の心得？少し読んでもいいですか？」

【黙読中】

星也「……さっぱり分かりません。」

のび太「ですよね。僕もさっぱりでした。」

星也とのび太は警備員の心得を黙読してみるも全く分からなかった。星也は自分の見つけた物をのび太に言った。やはり、のび太も銃弾が学校にあることを変だと考えた。次に家庭科室に入るも使えそうな物はなかった。次はその隣の調理室へと足をのばした。中に入っていくと調理員のおばさんが歪んだ顔つきになって死んでいた。ちなみに調理室にはパスコードAという2桁の番号の紙を見つけた。そして、調理室の中にあった小部屋へと扉を破壊して入った。…え

？どうやって破壊したか？星也が金属の棒を持ってきて叩き壊しました。それのせいで金属の棒が曲がってしまいました。その小部屋に入っていくと、

のび太「はる夫！はる夫じゃないか！」

はる夫「うう…のび太か……。」

のび太「はる夫どうした！？その肩の傷！？」

はる夫「の、のび太ぁ……気をつけろ…た、体育館には化け物が……」

ガクッ

のび太「はる夫！？」

星也はのび太とはる夫の会話が終わると首筋に手をあてる。

星也「…死んでいます。」

その言葉にのび太は悲しい顔をした。

星也「友達だったのですか？」

のび太「はい。野球仲間でした。」

星也の質問にのび太はそう答えた。星也ははる夫のそばに机の上にあった花を添えた。

星也「ごめんなさい。これがいまできる精一杯の供養です。」

星也はそう言うと両手をあわせた。のび太も星也にならった。

星也「…しかし、この傷はどう考えてもゾンビのものではないですね。」

のび太「そう言えばはる夫が「体育館には化け物が…」て言ってました。」

のび太のその言葉を聞いた星也は、

星也「体育館には僕1人で行きます。のび太君は保健室で待機してください。」

のび太「えぇ!?どうしてですか!?」

星也「はる夫君の傷からみて相手は大型のものと考えられます。だから、のび太君は危険だから保健室で待っていてください。」

のび太が聞いてきたことに対して星也はそう答え、保健室で待っているように促した。

のび太「嫌です。星也さんにだけ危険なことさせられません。小学生で頼りないかもしれませんが僕も行きます。」

そののび太の話を聞いた星也は、

星也「…分かりました。僕と一緒に体育館に行きましょう。」

そう言うと星也とのび太は調理室を出てのび太の案内で体育館に走っていった。3分で体育館についた。ついたら、

バンッ　バンッ

体育館から銃声が聞こえた。

星也「のび太君！行きますよ！

のび太「はい！」

星也とのび太は走って体育館に入っていった。

第7話　探索【1階】（後書き）

星也「みなさん、こんにちは。今日からこのあとがきで『星也の人間観察コーナー』を始めさせて貰います。読者のみなさまよろしくお願いします。とは言ってもこの小説の登場人物にインタビューさせていただくだけですが。最初のゲストは野比のび太君です。」

のび太「はい、何の用ですか？」

星也「少しインタビューさせていただきます。まず、趣味はなんですか？」

のび太「寝ることです。」

星也「……。次にこの街を出たら何をしたいですか？」

のび太「風呂に入って寝たいです。」

星也「……。なるほど、寝ることが好きなんですね。少し意外です。最後に作者（ゼクセル）からの質問です。好きな人はいますか？」

のび太「え…そ、それは……し、失礼しました。」
　　ビュウ
星也「速い…。どうやら最後の質問はのび太君にとって答えづらいみたいですね。それではこの辺で。また会いましょう。」

第8話　バイオゲラス（前書き）

はる夫「おい、ゼクセル！」

ん？なに？

はる夫「なに？じゃねーよ！俺の登場シーン短すぎだ！」

そんなこと言われてもねー…ストーリー上の問題だからね…

秀人「スピーディーログアウトマジワロタ。」

はる夫「あんたは黙っとけ！」

秀人「ほう、年上にその口調か。ＯＳＨＩＯＫＩが必要だな。くらえ！ボンバータックル！」

はる夫「ぐわあぁぁぁ…」

のび太「なにやってるんですか。あの３人？」

咲夜「知らないわよ。さあ…」

星也・美琴「始ま（ります）（るよー）」

星也「ハモりましたね。」

美琴「う、うん…／／／」

秀人「リア充爆発しろ！！」

第8話　バイオゲラス

走って体育館に入った星也とのび太。そこには…

のび太「出木杉！それに白峰さんも…」

出木杉「のび太君。星也さん。」

白峰「無事だったか。」

のび太は出木杉と白峰を見つけると歩いていく。

星也「なんですか？今の銃声は？」

出木杉「そ、それは…！！！のび太君、後ろ！」

のび太「え？うわぁ！」

星也の質問を答えようとした出木杉はのび太に呼びかける。のび太は間一髪なにかをよける。そのなにかは床に突き刺さった。一同驚きのあまりに声がでない。そして、現れたものは…

ズンッ

ギィヤオォォ…

現れたのはカメレオンが数倍大きくなったような巨大な化け物だった。

星也「な、なんだ！？これは？」

のび太「で、でかすぎる！」

星也とのび太は化け物のでかさに驚いているとカメレオンは姿を消した。

のび太「き、消えた！？」

星也「いや、たぶん周りの景色と同化しているだけです。」

出木杉「どちらにしてもほとんど同じです。」

星也は相手の能力を分析した。出木杉はあまり変わりないと言っているが、星也にはどう対処するかはもう考えていた。

星也「出木杉君、のび太君、白峰君体育館から逃げてください。」

出木杉「し、正気ですか！？あんな化け物を1人で相手をするつもりですか？」

星也「はい。しかしうるさいと音が聞き取りづらいので。」

白峰「なるほどな。」

星也の発言に出木杉は驚いた。星也はそれに補足を入れると白峰は納得した。そして、3人は体育館の外へ逃げようとしたら

星也「そこだ！」

そう言いチャクラムを投げるとなにかがチャクラムに刺さりその勢いで床にも刺さる。なにかはあのカメレオンの舌だった。

星也「帰れ。」

星也は懐に入り込みうすく黒い笑みをうかばせ言うと同時にカメレオンの腹を蹴り飛ばす。カメレオンは吹っ飛んで体育館の壁に直撃する。それを見ていた3人は呆然としていた。カメレオンは体育館の壁を突き破って逃げていった。カメレオンが逃げると3人は近寄ってくる。

のび太「す、すごいですよ。あんな化け物を蹴り飛ばすなんて。」

出木杉「ほ、ほんとですよ。」

白峰「あの化け物吹っ飛んでたぞ。」

3人はそれぞれ星也を賞賛した。

星也「なんか力を入れて蹴ってみたら吹っ飛びました。僕もびっくりです。最初は音で相手の位置を知って闘うつもりでしたけど。」

星也自身もとてもびっくりしていた。星也自身も含め4人は気づいていなかった。星也がカメレオンの腹を蹴るとき足に黒いオーラがあったことを。この時から星也の［悪魔］としての覚醒が始まっていた。

出木杉「そういえば、先ほど剛田君から電話があって「1回保健室に集まってくれ」と言っていました。」

出木杉がそう言うと

白峰「確か…体育館にこんな鍵がありました。」

白峰はなにかの鍵を渡してくれた。

星也「これは…「防火シャッター　２階」の鍵？」

のび太「たぶん、２階の防火シャッターを開ける鍵だと思います。」

星也は頭に？マークをうかばせた。のび太はどこの鍵かを言ってくれた。

出木杉「制御室で操作できたはずです。行ってみましょう。」

星也達は制御室へと向かった。体育館前の廊下の通りにあったのですぐついた。中に入ると鍵を差し込むらしき穴があった。そこへ差し込むと

ピーッ

という音がした。

出木杉「これで2階にも行けるはずです。」

出木杉がそう言うも

星也「まだ3、４階がなんもなってないみたいですが…」

出木杉「おそらく、３、４階の防火シャッターの鍵はべつにあると思います。」

星也「理解しました。」

出木杉は星也の質問にそう答える。星也は納得した。

星也「それでは戻りましょうか。」

星也達は保健室へと戻るのだった。

第8話　バイオゲラス（後書き）

星也「さあ今回の人間観察コーナーは中村秀人です。」

秀人「オス！おらひｄｅ…

星也「まず1問目です！趣味はなんですか？」

秀人「ちょ、最後まで言わせて！まあいい。えーと趣味はゲーム、アニメ鑑賞にニコニコ動画を見る！」

星也「流石厨二病の鏡です！もは末期のレベルではないでしょう。では2問目です。好きなキャラクターはなんですか？」

秀人「なんか…酷くない？えーと好きなキャラクターは「エルシャダイ」のイーノックかな。」

星也「ここはまだまともでした。では最後の質問です。神龍にお願いごと1つだけです。なにをお願いします？」

秀人「そ、そりゃあやっぱり「ギャルのパンｔ

星也「それでは時間です。またお会いしましょう。」

秀人「っておい！まだ言ってねえよ！」

第９話　途中経過（前書き）

序盤秀人の暴走注意報。それではどうぞ！１０話から『星也の人間観察コーナー』と並行して『ＮＧコーナー』をさせてもらいます。

第9話　途中経過

保健室へと戻ってきた星也達。他のグループはすでに戻ってきていた。

ジャイアン「ではこれから各グループずつ途中経過を報告してもらう。俺の班はコンビニに行って食えそうなものを持ってきた。この後も何回かに分けて取りに行くつもりだ。」

ジャイアンは自分達の途中経過を言った。ここで出木杉が

出木杉「机の上にあるものは食べれそうなものではないのですけど…」

出木杉は食べ物でない机の上のものに注目をした。

星也「むしろあれが食べ物に見えたら秀人みたいな変人です。」

星也は例えをまじえ出木杉に言う。

秀人「おい、星也！それはどういうことだ！？」

秀人は星也の例えが気に入らなかったようで怒り気味で星也に言う。

星也「それでは続きお願いします。」

しかし、星也はそれをおかまいなしに続きを言うようジャイアンを促す。

秀人「スルー！？おい、星也！スルーか？」

ジャイアン「それは近くにあった店から取ってきたものです。」

先ほどの出木杉の質問にジャイアンは答える。

秀人「それほど武器があるとは…もしかしてパン屋さんか？」

スネ夫「いえ、猟銃を扱っている店でした。」

のび太「そんなパン屋さん怖いよ。」

星也「全くです。どういう思考回路でパン屋さんにありついたのですか？」

秀人の問題発言にスネ夫はかるく答える。そして、のび太と星也がツッコミを入れる。

秀人「わりぃわりぃ冗談だ。じゃあ次はわたし達かな。」

秀人がそう言うと美琴が報告を始める。

美琴「私達は病院に行って傷薬や包帯などを持ってきました。私達ももう1回は取りに行きます。」

美琴は淡々と自分たちの成果を言った。

秀人「咲夜さん、流石な俺に惚れるやろ？」

星也「すみません、ちょっとすみません。」

秀人が咲夜にアホなことを言った後に星也は秀人の服の襟を持って廊下に出た。
ボグッ
「ぎゃう」
星也達が廊下に出た後に何かを殴った音と秀人の声が聞こえた。美琴は苦笑いをしていた。
星也「次の班よろしくお願いします。」

星也がそう言うと出木杉は

出木杉「そういえば静香さん達見かけなかったんですがどこにいたんですか？」

出木杉がそう聞くと

静香「私達は園芸部のところに行ってハーブを取ってきたわ。」

咲夜「そこにあるものは調合済みだから持っていっていいわ。」

静香がそう言うと咲夜は保健室の端に指をさす。確かにそこには調合済みのハーブがあった。

白峰「次は俺達かな。」

出木杉「僕達は学校を探索していたのですがハンドガンの弾や体育館の鍵しか見つけれなかった。体育館でのび太君達に助けてもらいました。」

出木杉が残念そうに言った。

ジャイアン「へえ～、のび太にか。」

スネ夫「やるようになったじゃないか。」

ジャイアンとスネ夫は少し小馬鹿にして言った。

星也「のび太君はすごいですよ。ハンドガン1発でゾンビを倒したんですよ。」

のび太「星也さんこそハンドガン1回も使ってないじゃないですか。」

星也「僕にはチャクラムがあれば十分です。」

星也とのび太は誉め合った。のび太の言葉を聞いて星也はこれだけでいいと言ってチャクラムを出す。

秀人「毎回思うけどその武器は一体何なんだ？どこで手に入れた？」

星也「これですか？今は亡き親友からもらったものです。」

秀人「なんか……すまんな。」

秀人がした質問に対し星也が言った答えに一同気まずくなった。

星也「そうだ！みなさんに言っておかなければならないことがあります。」

のび太「そうだ！はる夫が……死んだ。」

星也、のび太除く一同「！！！！！」

星也の言葉に思い出したようにのび太が言った。はる夫を知っていた人は驚き、悲しんだ。

星也「しかし、はる夫君は「体育館にはきをつけろ」みたいなことを言っていたので僕らは体育館に行ってみました。そしたら、出木杉君達と合流したわけです。」

星也がはる夫の言っていたことを話した。

のび太「それで体育館には巨大な化け物がいたんだよ！！！」

星也、のび太、出木杉、白峰除く一同「！！！！！！」

のび太の言葉に一同は驚きを隠せなかった。

ジャイアン「それは本当か？」

白峰「ああ、本当だ。保証する。」

星也「カメレオンみたいな生物で周りと同化できる能力を持っていました。」

咲夜「それは厄介ね。」

ジャイアンの質問に白峰と星也が答えた。咲夜は厄介だと言っていた。

ジャイアン「静香ちゃん達はそういうの見たか？」

静香「いいえ、見てないわ。」

ジャイアン「じゃあ、そいつは注意しろよ。」

ジャイアンは静香に質問してそう言った。

のび太「しばらく大丈夫だと思いますよ。星也さんが蹴り飛ばしましたから。」

のび太、星也、出木杉、白峰除く一同
「ハァ！？」

のび太の言葉にまたしても一同驚く。

スネ夫「星也さん、人間ですか？」

星也「……。」

スネ夫が聞いたことに星也は無言だった。そして、黙って保健室を出てってしまった。

秀人「スネ夫、お前あいつに1番言ったら駄目なこと言ったな。」

スネ夫「え？」

美琴「彼は中1の頃に私達の街に来たの。そして、彼は中1の時から1人暮らしだったわ。もとのいた街は破壊されたって言ってたわ。そこの街では人として認められずに悪魔として認められていたらしいのよ。」

美琴の話した内容を聞いて一同沈黙が続いた。それを破ったのは秀人だった。

秀人「まあ、あいつは優しいしいい奴だから気にすることはない。ただ、そういうことはあいつのトラウマをよみがえさせるから、しないほうがいいって話だ。」

秀人は先ほどの美琴の発言をフォローするように言った。

秀人「しばらくあいつは来ないと思うからさっさと探索再開させようぜ。」

ジャイアン「じゃあ、みんな散開！」

こうして一同は散開した。トイレで星也が倒れてることを知らずに。

第9話　途中経過（後書き）

星也「今回もやってまいりました。人間観察コーナーの時間です。今日のゲストは姫野美琴さんです。」

美琴「みなさんこんにちは。」

星也「では早速1問目です。姫野家はかつてシャーマンだったと聞きますが本当ですか？」

美琴「はい。本当です。主に除霊をしていたようです。」

星也「なるほど。それでは2問目です。何か召還できると聞きますが本当ですか？」

美琴「できるよ。出てきて、コン！」

ぽんっ

星也「これは…狐ですか？かわいいですね。」

美琴「この子は【九火】と言われる怪異の1つ。勝手に尻尾に触れると9日後に火で死ぬと言われてるわ。」

星也「なかなか興味深いですね。美琴さんが尻尾に触れたときはどうなるのですか？」

コン「我の尻尾は認めた者しか触れぬ。」

星也「しゃべれたの？それはおいといて最後の質問です。好きな人はいますか？」

美琴「え…？す、好きな…人？／／／」

星也「あの、顔が真っ赤ですが誰ですか？」

コン「仕方がない。我が話そう。美琴の好きな人はおｎｕ

美琴「ちょっとコン！勝手に言わないで！じ、じゃあね。星也君／／／。」

星也「……美琴さんには誰だか知りませんが好きな人がいるようです。インタビューする人が行ってしまったのでこれで終わります。またお会いしましょう。」

第１０話　覚醒（前書き）

少し分かりにくいです。書き方変えました。前のとどちらがよいか意見ください。

第１０話　覚醒

Ｓｉｄｅ　星也

僕は少し昔のことを思い出してしまったので、気分を変えるため少し歩いていました。しかし、トイレの前にさしかかったところで頭痛が襲ってきました。

「ぐ…ぐあ……あ。」

な…なんだこの痛みは？あ、頭がかち割れるくらいに痛い。僕はトイレに入り頭を冷やそうとしたが、入ったところで意識を失ってしまいました。

僕が目を覚ますと辺りが真っ黒な空間に立っていました。

「ここは…どこでしょうか？」

？「やっと目が覚めたか。」

いきなり誰かが僕に話しかけてきました。振り向くと…

「ぼ、僕？」

自分みたいな人が立っていました。

？「そうだ。俺はお前だ。」

「意味が分からないです。世界で僕は1人だけの筈です。」

？「ああ、その通りだ。でも、ここがお前のいる世界と思うか？」

何を言っているんです？この人は？

？「はあ…。全く解っていない様子だな。少しくらいは教えてやるか。俺はお前の心の闇だ。自分と区別つけたけりゃ「黒也」とでも呼べ。

「なるほど。では、黒也さん。ここは僕の心の中なんですね。」

黒也「お～ぉ、流石。察しが早いこと。」

「では、続けて問います。何をしにきたのですか？」

黒也「何をしにきたか？昔の約束を果たしにきたんだよ。」

「？」

「まあ、説明よりやったほうが早い。いくぞ。」

すると彼は白い球状をこちらに投げてきた。僕は避けようとしたが、

体が動かなかった。当然、白い球状のものをくらってしまいました。…あれ？痛くありません。どうして…！！

「うあ…い…痛い。」

また、あの痛みだ。頭がかち割れてしまう…。

Ｓｉｄｅ秀人

言葉で言ってもやはり心配になった。星也を探して三千里…なんてな。ってふざけてる場合じゃねー。星也、どこにいったんだよ。トイレを開けてみた。すると星也が倒れていた。

「星也！！！！！」

おい、どうした？起きろよ。おい。どれだけゆすっても星也は起きなかった。わたしは急いで保健室に運んだ。みんなにはあまり心配をかけさせないため連絡はしなかった。

Ｓｉｄｅ星也

かち割れるくらいの痛みと共に何かが流れ込んできた。これはもしかして…

「昔の……記憶？」

黒也「そうだ。昔の記憶だ。お前は自分の正体を知っていたらあの

力を使って争いを起こすかもしれない恐怖と自分の正体をくらますために俺と契約をした。お前があの力を預けるかわりに6歳までの記憶を俺に差し出した。そして、俺にこう頼んだ。「この力はいつか必要となる日がくる。そのときに記憶と共にこの力をもらいたい」と。そして、そのときがきた。だから昔の記憶と共にお前の悪魔の力も返そう。」

ああ、なるほど。そういうことか。…懐かしい。よく幼稚園でケンカしたり、物壊していたりしていました。あ、じいちゃんだ。綺麗な土下座です。じいちゃんから聞いた言葉がいくつも蘇ってきます。僕はじいちゃんに憧れていたんだなあ。そんな記憶を思い出していきました。

黒也「これがお前の記憶の全てだ。悪魔の力も使えるはずだ。やってみろ。」

悪魔の力？こうでしょうか？おお、力をためてみたらなにか黒いオーラが出ました。

黒也「それが悪魔の力だ。完全な悪魔の力を得るためには魔刀『阿修羅』が必要だ。」

「まだ完全ではないんですか？」

黒也「お前は悪魔の力を半分にし俺と魔刀にそれぞれ預けた。だから、お前の力はまだ半分しか戻っていない。魔刀はどこにあるか知らないぜ。」

魔刀『阿修羅』……あ！思い出しました。

「多分魔刀は僕のいた世界にあります。」

黒也「…どうすんだ？お前？」

で、ですよねー。まあ、それはまた考えるとしまして…。あ、そういえば

「僕の悪魔の力には個人としてどんな能力があるんですか？」

黒也「ほう、それも記憶にあったか。」

「はい。しかし、昔の僕はその能力を使っていないようなので是非教えてもらいたいのですが…」

黒也「仕方がねーな。特別に教えてやるよ。お前の悪魔の力は…

というものだ。分かったか？」

「分かりました。」

そ、そんな能力があるとは少し予想外です。

黒也「そろそろ戻ったほうがいいんじゃね？みんな心配しているだろうよ。」

「いや、自意識で戻れるものなんですか？」

黒也「ここで目をつぶって「戻れ」と願うと戻れる。」

あ、そんなのでいいんですか？なんと簡単な。

「それでは戻りますが１つ質問が…」

黒也「なんだ？」

「なんで僕の約束を守ったのですか？そのままにしておけば僕を乗っ取れたのじゃないか？」

黒也「なかなかに鋭いな。やっぱり。お前と同じ律儀なんだよ。約束は守る主義だ。」

「そうかありがとうございます。」

黒也「あと、ここには意識して目をつぶれば来ることができるからな。」

「分かりました。」

黒也「闇の力ならいつでも…

「本当にありがとうございました。また今度お会いしましょう。」

僕はそう言って目をつむった。気がつくとどこかのベッドに横たわっていた。

Ｓｉｄｅ美琴

星也君…お願い。早く目を覚ましてよ。ずっとそう願った。

秀人「星也が目を覚ましたぞ。」

！！！…星也君！

Ｓｉｄｅ星也

秀人「星也が目を覚ましたぞ。」

起きると秀人がそう言っているのが聞こえました。辺りを見るとここは保健室のようです。確認をすると誰かが僕に抱きついてきた。

「美琴さん？」

美琴「よかった。よかったよ。私、ずっと心配していたのよ。星也君、目が覚めてよかった。」

美琴さんは優しいですね。寝ていた僕をずっと心配していてくれて。

秀人「姫野に感謝しろよ。ずっと看病していてくれたんだぞ。」

ずっと看病していたのですか？美琴さんに頭があがりません。

「美琴さん、ずっと看病してくれましてありがとうございます。僕

はもう大丈夫です。」

僕は笑顔で美琴さんに言った。なぜか美琴さんの顔が赤くなっていました。

秀人「なんで倒れてたんだ？」

「いや、いきなり頭痛がしたもので。頭がかち割れるくらい痛かったです。」

秀人「大丈夫か？探索できる？」

「できます。」

美琴「星也君……無茶…しないでね。」

「分かりました。美琴さん。」

秀人「のび太と出木杉、白峰はもう2階の探索に行ったぞ。」

「秀人、ありがとうございます。」

美琴「本当に大丈夫なの？」

「大丈夫です。じいちゃんみたいに体は強いほうです。」

秀人「お前がわたし達に家族の話したの初めてじゃね？」

「え、そうでしたっけ？まあ、いいです。では行きます。」

そうして僕は2階に走っていった。

第１０話　覚醒（後書き）

ＮＧ集　　その１
～バイオゲラスより～

星也「な…なんてでかさ！？みなさん、早く逃げましょう……　ってのび太君！？どこからサブマシンガンを…」
のび太「汚物は消毒だーーーーー！！！！」
ダダダダダダダ…

　グギャァァァァ

星也「の、のび太君が壊れました。出木杉君、のび太君をなん…と…か？で、出木杉君？君もどこからアサルトライフルを？」
出木杉「絶好のチャンスだぁ！」
ズダダダダダダ…
星也「白峰く…ん？」
白峰「今から貴様に生き地獄を味わわせてやる。」
星也「白峰君！待て！ナイフ持って突撃しないでください！」

そして5分後…バイオゲラスは体育館で死んでしまった。

第１１話　探索【２階】（前書き）

今回のあとがきはオマケです。もう１人のオリキャラの話です。

第１１話　探索【２階】

Ｓｉｄｅ星也

悪魔の力が半分戻った僕は２階へと登っていきました。

「　のび太君！どこですか～？」

２階につくとのび太君を探しました。しかし、出てきたのは、ゾンビ達でした。

「ゾンビさんはお還りください。」

そう言ってチャクラムを利用し、ゾンビ達の首を切断しました。かなりグロいです。

「のび太君。
　ガタンッ
！！！？」

僕が叫ぼうとしたら、いきなり廊下の天井の板が外れた。

（もしかして…のび太君かな？）

ねぇから。絶対。Ｂｙ作者

僕は警戒してそこを見る。すると、そこから人とノミみたいな虫を抱き合わせたような生物が出てきた。

「　なんですか？これ…のび太君かと思いました。」

絶対ねぇから！By作者

その生物は降りてきていきなり飛びかかってきました。

「遅すぎます。」

僕は生物の飛びかかりをひょいとかわしました。そして、生物の後ろにまわり、

「さようなら。」

僕はうすらと笑いながら生物の背中を蹴ると生物は壁にめりこみました。念のため、チャクラムでとどめをさしておきました。

「ふう…。」

僕は一息つくと

白峰「星也さん？」

「ああ、白峰君。」

白峰君と会いました。あれ？出木杉君は？

「白峰君、出木杉君は？」

白峰「今は別行動をしています。」

「分かりました。あと1つ聞きたいことが…
バンッ　バンッ
！！！！！」

僕が白峰君に質問しようとしたら、近くで銃声が聞こえました。

星也「今、近くで銃声が！」

白峰「星也さん、あそこの部屋です。」

白峰君は「図書室」と書かれている部屋を指さしていました。すぐに僕らは図書室へと向かいました。

白峰「おい！誰かいるのか？」

のび太「その声は白峰さん？」

「のび太君！？どうしたのですか？」

のび太「星也さんも。この扉が開かないんです。」

白峰「じゃあ、コイツで。」

星也「待ってください。ここは僕に任せてください。のび太君。扉からかなり離れてください。」

僕はのび太君にそう言うと扉を思いっきり蹴りました。扉は向こうの壁まで吹っ飛んでいったようです。

星也「あれ？やりすぎました。」

のび太君と白峰君が呆然としています。やはり、少し扱いが難しいですね。…ハッ！

星也「のび太君。後ろ。」

のび太「えっ？」

僕の言葉を聞いてのび太君は後ろを向いた。

カアーカアー

のび太君の後ろからゾンビ化したカラスがきました。

のび太「うわあああ！！ど…ドラえも～ん！」

やっぱりドラえもんもいるのか。会ったらサイン貰いましょう。…ってそれどころではありませんでした。

星也「白峰君。のび太君を頼みます。僕はカラスをなんとかします。」

僕は白峰君にそう言ってカラスに向かっていった。

Ｓｉｄｅ白峰

星也さんは俺に「のび太を頼む」と言って走っていった。じゃあ、野田を助けるか。

「こっちだ！野田！」

のび太「野田じゃありません！野比です！」

あれ？名前間違えたか。まあ、いいか。

のび太「白峰さん。ありがとうございます。」

無事に図書室から出ると野比は礼を言ってきた。

「いや、お礼なら星也さんに言え。星也さんが指示したからよ。」

まあ、実際そうだしな。そういえば、星也さん大丈夫だろうか。……大丈夫だろ。

のび太「ハッ！白峰さん、僕は用があるので行きます。」

なんだ？なんかあるのか？

「俺は星也さんを助けたら、また１階見てくる。」

そう言うと野比は走っていった。その後俺は図書室へ入った。俺の予想通りカラスは星也さんによって全滅していた。

Ｓｉｄｅ星也

弱すぎます。束になってもはなしになりませんでした。そう考えていると白峰君が入ってきた。

白峰「あれ？カラスは？」

「全滅させました。のび太君はいませんがどこへ行きましたか？」

僕はのび太君のことを白峰君に聞きました。

白峰「なんか用事を思い出したようで走ってどこかに行きました。でも、まだ2階にいると思います。」

なるほど。早くのび太君においつかなくては。

「ありがとうございます。では、また。」

白峰「星也さん、1つ質問いいですか？」

僕は走ろうとしたら白峰が質問をしてきました。

「なんですか？」

白峰「……星也さんは一体なんなんですか？」

…なかなか鋭いですね。僕には何かがあると考えているのですか。まあ、常識から外れているどころじないところを見ていますしね…。

「……その話はまた後にしてもらえませんか？今は急いでいるので。」

白峰「…分かりました。また今度話してもらいます。」

僕はあいまいな返答でなんとかやり過ごした。しかし、みなさん僕

が悪魔だと知ったらどんな反応するでしょう。やっぱりみなさんも僕を拒絶するのでしょうか。少なくとも秀人や美琴さん、それに彼とは友達としていられないような気がします。僕はそんな不安を抱えながらのび太君を探しました。しばらく探すとのび太君は女子更衣室の前で発見しました。

「のび太君。一体何をしているのですか？」

のび太「えーと…中に誰かいるのですが中から鍵がかかって入れないんです。」

「のび太君。少しどいていてください。」

ドカッ

僕は鍵がかかっている更衣室の扉を蹴り壊した。

「　行きますよ。」

のび太「……はい。」

やっぱり少しひきましたね。当然ですか。

のび太「あれ？何もいません。僕の勘違いでしょうか…」

ガタンッ

「いや、ロッカーの中になにかいます。１つずつ調べていきましょう。」

僕らはロッカーを１つ１つ調べました。他の人からみたらただの変態です。調べていくと１つだけ鍵がかかっているロッカーがありました。

「ここですね。のび太君、なにか武器を持っていませんか？」

のび太「一応トンファーを持っていますが僕がやります。星也さんだったら、少し危ないです。」

「じゃあお願いします。」

僕がお願いするとのび太君はロッカーをトンファーでたたきはじめた。本当に変態に見えます。そんな事を考えているとロッカーの鍵を壊していつでも開けられる状態になったみたいです。

のび太「星也さん、1・2・3で開けますよ。」

「分かりました。」

僕が返事をするとカウントを始める。

のび太「1・2・」

のび太君が3と言おうとしときでした。

バンッ

？「いやあああ！こないでえええ！」

のび太「うげえっ！」

のび太君を吹っ飛ばして出てきたのは学校の制服を着た頭に黄色いカチューシャをつけた子だった。

出木杉「なんですか！？今の音は！？あ……聖奈さん？」

聖奈「で、出木杉君？」

出木杉「無事だったんですね。」

聖奈「私は大丈夫だけど…その子が…」

星也「のび太君！しっかり！」

出木杉「のび太君！大丈夫！？」

のび太「う……出木杉君……僕はもうダメだ…ど、ドラえもんにミーちゃんと仲良く……ガクッ」

星也「のび太君ーーーーーー！」

僕らはジャイアン君に連絡し、一回集まることとなり、保健室に戻ることにした。僕はのび太君を担いで。

～保健室～

ジャイアン「聖奈さん！聖奈さんじゃないか！」

スネ夫「良かった。生きていたんだ。」

聖奈「私、みなさんと会うまでもう本当にダメかと…。」

星也「でも、諦めなかったからこうして希望が見えましたね。」

秀人「そう！わたしという名の希望…げふっ！」

またこの人は…。せっかく感動的な空気なんですから少し黙っていてください。え？なにしたか？もちろん肘うちです。秀人の腹にです。

ジャイアン「聖奈さんがいれば心強いです。」

スネ夫「心強い根拠が分からないけどよろしく。」

聖奈「はい！非力ながらも頑張らせてもらいます。」

聖奈さんがそう言った。なかなかしっかりとした子ですね。ファンクラブとかありそうですね。

静香「それでのび太さんはなんで寝てるの？」

星也「さっきロッカーに当たったときに頭をうったようですね。」

美琴「外傷はないので大丈夫だと思います。」

僕と美琴さんはみなさんに説明しました。

聖奈「ご、ごめんなさい。私のせいで…」

ジャイアン「聖奈さんはなにも悪くないよ。悪いのはボケーッとしていたのび太！」

スネ夫「そう！のび太が悪いんだ。」

出木杉（果たして本当にそうなのか？）

聖奈さんは謝るがジャイアン君とスネ夫君はのび太が悪いと主張していました。本当にそうなのでしょうか。あれ？

「そういえば、白峰君は？」

咲夜「本当だわ。さっきまでいたのに…」

みなさん白峰君を心配しているようですね。もしかして…。

ジャイアン「それじゃあ今いる人で話し合いするぞ。」

～話し合い後～

のび太「あれ？ここは？」

「保健室です。あと机の上に聖奈さんから手紙があります。」

僕がそう言うとのび太君は手紙を読み始めた。

〜のび太手紙黙読中〜

のび太「なるほど…。これは、手紙に書いてあった3階の防火シャッターの鍵かな。」

「そのようですね。では、行きましょう。」

僕らは管理室へ行って3階の防火シャッターの鍵をまわしました。すると、3階の防火シャッターが開いたようです。そして、3階に行きました。

第11話　探索【2階】（後書き）

オマケ

な、なんだ？ここは？確か…試合の帰りに白い空間に包まれて……ん？何だ？大勢の人が歩いてきたぞ。いや、あれは、ゾンビだ…。目障りな。

「邪魔だ！どけえ！」

そう言って竜神流拳法を使い、ゾンビ共をぶっ倒していった。星也！どこにいる？

オリキャラ紹介～1～（前書き）

今回は秀人、美琴のプロフィールです。

オリキャラ紹介～1～

中村（なかむら）　秀人（ひでと）

身長　１８８ｃｍ
体重　６８ｋｇ
年齢　１６歳
性別　男
性格
・さびしがり屋
・穏やか
・ナルシスト
・のんびり屋
誕生日　５月１７日
好きなもの
・ハンバーガー
・コーラ
・フライドポテト
・ニコニコ動画

嫌いなもの
・蛸
・烏賊
・高二病

外見　スケット・ダンスにでてくる笛吹和義のメガネを外したような感じ

星也の親友。かなりのイケメンであるも高二病を忌み嫌う中二病。さらにニコ厨といういう痛い設定も持っている別名「残念すぎるイケメン」。そして、ナンパの常習犯。しかしいざとなると頼りになる心強い人。銃火器は全て扱え基本的には銃を使って戦う。あと、設計図があれば銃火器の改造、オリジナル銃火器を作ることができる。ある事件により父親を失っている。

能力

秀人自身持っているがネタバレとなるため表記不可。

姫野（ひめの）　美琴（みこと）

身長　１６３ｃｍ

体重　４３ｋｇ

年齢　１５歳
性別　女
性格
・優しい
・明るい
・礼儀正しい
・天然
誕生日　１０月７日
好きなもの
・あっさりしたもの
・ロールケーキ
・林檎
・才川星也（ｌｏｖｅ）

嫌いなもの
・脂っこいもの
・味のしつこいもの
・人を簡単に殺す人

外見　怪異症候群の姫野美琴そのまま

もともとはキャラをひっぱってくるだけだったのに完全にオリキャラとなった。いろいろあって１人になったところを星也に拾われる。一緒に住んでいたことで星也に恋心ができる。誰よりも人の大切さを知っている。シャーマンの家系で祓魔中心の呪術を身につけている。医療についても詳しい。

能力

・妖狐「九火」の召還
・祓魔の札を扱える
・怪異を感じ取る力
・怪異の力を弱くする力

オリキャラ紹介～1～（後書き）

今回はあとがきコーナーは休みです。すみません。

第１２話　探索【３階】（前書き）

今回はかなり多めにカットを入れました。すみません。

第１２話　探索【３階】

Ｓｉｄｅ星也

僕たちは３階の防火シャッターの鍵で防火シャッターを開きました。そして、３階に行こうとしたときでした。

ピリリリリ…

突然誰かのケータイが鳴りました。僕のではないですね。では、

のび太「もしもし。」

やはりのび太君のでした。何か話していますね。誰からでしょうか。少し待つとしましょう。

のび太「しずかちゃん！？もしもし！？」

「のび太君！？どうかしたのですか？」

のび太「今しずかちゃんから電話がきまして裏口のロックを解除する書類を見つけたらしいのですが…ゾンビに追いかけられていたみたいで…」

「それで電話がいきなり切れたんですね。」

のび太「はい。」

あちらはかなり大変なようですね。無事だといいですけど…。あ！そうだ！電話をかけて場所を教えてもらえば…いや、今は駄目です。ゾンビに追いかけられているようなのでまたあとにでもかけましょ

う。

「そうですか。では僕たちは探索を再開させましょう。」

のび太「え？でも…」

「助けに行きたいのは分かりますが場所も分からないのでどうしようもありません。だから、僕たちは今出来ることをやりましょう。」

のび太「そうですね。では3階に行きましょう。」

僕はそう言ったもののやはり不安が残ります。しかし、ずっと心配していても何も起こらないので目の前のことに集中しよう。そして、僕たちは3階に走っていった。

というわけで理科室とその横の部屋以外の探索が終わりました。…え？なんでとばしたか…ですか。3階は1階みたいに探索していっただけですし、敵も弱すぎて話になりません。しかも、広いわりに必要そうなものが何かの小さい鍵、パスコードB、ハンドガンの弾、ショットガンの弾くらいしか見つからなかったのです。だからとばさせてもらいました。

「理科室ですか…。ここも僕が…」

のび太「星也さん。隣の部屋開いていますよ。」

「そうですか。ではそこから入っていきましょう。無理矢理蹴り飛ばすこともないですから。」
さて、隣の部屋は…理科準備室ですか。必ず学校にありますよね。理科準備室。僕の通ってる高校にもありました。僕が理科準備室の扉を開けました。すると中には血だらけの少年と青い狸がいた。

のび太「ど、ドラえもん！それに安雄も！」

ど、ドラえもん！？あの国民的アイドルのドラえもん！？え？本当に？真面目に本物ならサインもらいたい。

ドラえもん「のび太君！…そちらのかたは？」

「僕ですか。僕は才川星也と申します。星也と呼んでもらえたら光栄です。」

お互いの自己紹介をして、握手した。や、やばい。ドラえもんさんと握手した。あとで秀人に自慢しましょう。

のび太「や、安雄！どうしたんだ！？その傷は？」
安雄「の、のび太か。この学校はマジでやばい。早く街から出るんだ…とんでもない化け物がいるぜ。」

ドラえもん「喋っちゃ駄目だよ。じっとしているんだ。」

「この傷は……」

この傷…はる夫君の肩の傷と同じです。もしかして…

「安雄君！その傷は誰にやられたものですか？」

安雄「あれは…地球上の生き物じゃねぇ…お化け嫌いな僕にはゾンビはちびる程怖かったがもう慣れちまった…でもあの化け物を見たときは腰が抜けたよ。まるでカメレオンみたいな奴だったよ。」

「やはり、はる夫君と同じ化け物ですね。おまけに安雄君は体に毒が入っているようですね。」

ドラえもん「そうなんですよ。だから、血清が必要なんですが…」

「分かりました。僕が取りに行きます。のび太君はここで待っていてください。」

自分で言うのもどうかとは思いますが足が速い僕が逝くべき…あ、間違えました。行くべきでしょう。

のび太「でも、血清がどこにあるか分かるのですか？」

「おそらく保健室にあると思うので少し行ってきます。」

僕はそう言って保健室を出た。しかし…

「カメレオンの血清って日本にあるのか？確か外国には毒のあるカメレオンの血清とかあるみたいですが…」

まあ、とりあえず行ってみてから考えます。ところが、

ァァー…

ゾンビさんたちの熱烈な部活勧誘が…。え？ゾンビさんたちは何部か？ゾンビ部だと思います。面倒なのでスルーします。そして保健

室につきました。ほぼ理科室の下みたいな感じですね。ええと…血清は…あの戸棚のようですね。か、鍵がかかってる！？どうしましょう？…あ！そういえばさっき小さな鍵を拾いましたがここの鍵でしょうか。あ、開きました。ええと血清は…これですね。あれ？金田さんは？まあ、今はいいです。早く行きましょう。僕は走って理科準備室に行った。

「ドラえもんさん。血清です。」

そう言ってドラえもんさんに渡した。

ドラえもん「安雄君。血清うつからもう大丈夫だよ。」

ドラえもんさんは安雄君に血清をうった。果たしてあの手で注射器を持てるのでしょうか。何はともあれ安雄君の命は救われました。

安雄「星也さんありがとうございます。それとのび太ぁ…僕はお前を見直したよ。普段はダメダメで弱虫な癖にゾンビたち相手にあんなに…勇敢に…戦う…な…んて……」

のび太「安雄！？おい！どうしたんだ？」

ドラえもん「大丈夫。気を失っただけだよ。命に別状はないはず。」

「よ、よかった。」

ドラえもん「近くに相談室あったよね。そこで休ませよう。」

のび太「いや、待ってくれ。保健室に運ぼう。今からみんな呼ぶね。」

待って。確か廊下にはさっきスルーしたゾンビ部のみなさんが…。
ここは責任持って僕が倒そう。

「では僕は廊下にいるゾンビを迎撃してきます。」

僕は廊下に出てゾンビを倒していきました。そして保健室につきました。

Ｓｉｄｅ秀人

わたしだ。秀人だ。わたしたちは今ゾンパラ（ゾンビパラダイス）で今ゾンビと戯れているところだ。

美琴「１人でブツブツ言ってないで手伝って下さい。」

姫野に怒られた。まあ単にゾンビの群れと交戦中です。…っておわぁ後ろからゾンビがぁ！

美琴「中村君！」

あぁ、オワタオレ。Ｍｙ　ｌｉｆｅ　ｆｉｎｉｓｈ．　しかし…
　　バンッ
ショットガン特有の銃声が鳴り響いた。気がつくとわたしを襲おうとしていたゾンビの首は吹っ飛んでいた。

？「久しぶりだな。姫野に秀人。」

声のした方向を振り向くとわたしたちだけでなく星也も知っている
あの男が立っていた。

第１２話　探索【３階】（後書き）

ＮＧ集その２
～保健室の戸棚にて～

星也「この鍵でしょうか？ちょっと試してみましょう。」
　ガチャッ
星也「開きました。では血清を…ん？なんですかこの箱？」
ピンポーン…《血清を利用するにはＩＤカードを差し込んで下さい。》
「……どこにあるんですか？」
～３分後～
「戸棚の中に偶然入っていまして助かりました。」
ピンポーン…《ＩＤカードの認識まで３０分～１時間かかります。》
「安雄君死んでしまいますよ。」
～３０分後～
「まだ間に合いそうです。しかし、急ぎましょう。」
ピンポーン…《ゴールドエンブレムをはめてください。》
「ふざけるなあぁぁぁぁぁ…」

そのとき

のび太「安雄おぉぉぉぉ…」

「あっ……やちゃった。」

最後キャラ崩壊が…ていうかやちゃったじゃない…。

第１３話　準主人公Ｓｉｄｅ（前書き）

今回はもう１人のオリキャラ視点です。主人公が空気です。

第13話　準主人公Ｓｉｄｅ

Ｓｉｄｅ龍輝

よお。俺の名前は高岸龍輝。ただの高1だ。しかし、突然白い空間に包まれ気がつくとゾンビだらけの街に飛ばされていた。まあ、ゾンビと言っても肉体は腐っているから素手でも倒すことができる。でも、もしものためにショットガンを2丁持っている。ゾンビが多い面倒な所では右手、左手にそれぞれショットガン1丁ずつ持って打っている。そんな終わりの見えない動作をしてると俺の親友である秀人と顔見知りの姫野が見えた。秀人がゾンビに襲われそうだったので右手のショットガンで秀人を襲おうとしたゾンビを打った。それで今に至る。

秀人「なっ…龍輝！なんでここに？」

「俺がいたら悪いか？」

なんでここに？ってどういうことだ？

美琴「高岸君。どういう経路でここに？」

龍輝「あ？なんか白い空間に包まれて…。」

秀人「お前もか…。」

はあ？どういうことだ？

「おい待て！話が見えないぞ。」

秀人「…わたしが説明しよう。」

そして、秀人はいろいろ話してくれた。世界についてのこと、アビリティーについてのことなど。その話は非現実的だったがこの状況だから納得できた。でも、その話を聞いて疑問に思ったことがあった。

「待てよ。誰かにって誰にだ？」

美琴「分からないんです。でも、私たちはそう仮定しているんです。」

……確かにそう仮定する以外ないな。でも、俺は…

「俺はひとつ心当たりがあるんだが…」

秀人「！？だ、誰だよ！一体？」

「……言ってもいいが、１つだけ約束がある。」

美琴「なんですか？」

「星也にはこれからする話は言うな。」

もし、あいつがこの話…というより仮定を聞くと傷つくかもしれないからだ。

秀人「なぜ星也に？…まあいい。で、それで誰だ？」

「……才川家だ。」

秀人・美琴「！！！！！？？？？？？」

そりゃあ驚くわな。だってあいつの家の人たちだもんな。

美琴「ちょ、ちょっと待って。じゃあ星也君がこの状況を…」

「いや、違う。あいつはこの状況を生み出したことになんの関連もない。ただ、あいつは俺らには家族のことを話そうとしなかった。たぶんあいつは才川家に何かしら嫌な思い出があるのだろう。」

秀人「いや、さっき少しだけじいちゃんのことを話していたが…」

「じいちゃん？いや、ありえんな。俺は才川家について調べたんだが才川家の祖父は２０年前に死んでいる。」

秀人・美琴「！！！？？？」

「他にまだ分かったことがある。才川家のあった街が４年前に跡形もなく消されている。この街が消されたのは９月９日。そして星也が俺たちの街に来たのが９月１０日だ。妙につじつまがあうんだよ。」

美琴「あの地下工場爆発事故ですか。ニュースになっていましたね。」

秀人「地下工場が爆発しただけなのにその街の住民全員が亡くなったと言われているあの不自然な事故か。一時ニコ動の中二病共が「

悪の秘密結社の仕業だ。」って騒いでいたな。」

「そうだ。その後才川家は事故の責任をとらされ、死んでいるとされている。」

美琴「でも、星也君が日本に残っていた。」

「そう。もし才川家が生きていたとしたら星也は邪魔な存在のはずだ。」

美琴「なんでですか？」

「才川家は裏で政治を牛耳っているような一家だぞ。そんな簡単に死んだとも思えん。才川家が何かを隠し研究をしているならば世間に死んだと思われたほうが動きやすい。だから星也が生きていたら才川家はまだ生きていると思われるんだ。」

秀人「つまり、大雑把に言うと才川家の研究をしているものがこの状況を作り出したと言いたいのか？」

「そういうことだ。こんなゾンビを作り出せるオーバーテクノロジーを持っている人は限られているからな。」

秀人「なるほどな。」

しかし、この仮定は信憑性がないんだよな。

美琴「でも、それなら星也君は何者なの？星也君の言っていたじいちゃんって誰なの？」

秀人「あいつは昔から謎だらけだよな。」

「……星也はどこにいる？」

1回あいつと話したい。なんとしてでも。

秀人「あいつなら近くの小学校にいる。」

「わりぃ。そこまで案内してくれ。あいつに会いたい。」

秀人「……同性愛者？」

「……お前1回あの世を見る必要があるな。」

美琴「中村君。冗談言ってないで行くわよ。」

そして、生存者が集まっている小学校へと到着した。

第13話　準主人公Ｓｉｄｅ（後書き）

星也「皆さんこんにちは。星也の人間観察コーナーです。今日のゲストは高岸龍輝です。」

龍輝「よろしく。」

星也「では1つ目の質問です。趣味はなんですか？」

龍輝「ゲームだな。」

星也「あれ？バスケは…」

龍輝「バスケは俺の専売特許。」

星也「……。では2つ目の質問です。竜神拳法ってなんですか？」

龍輝「竜神拳法は高岸家に代々伝わっている拳法だ。主に「氣」という波動を使う。」

星也「なるほど。それでは最後の質問です。好きなゲームはなんですか？」

龍輝「『龍が如く』や『ファイナルファンタジー』」

星也「『ファイナルファンタジー』！？僕も好きです。ちょっと語り合いましょう。それではこれで終了です。またお会いしましょう。ええと…好きなキャラクターですか……」

第１４話　救出（前書き）

今回はあとがきコーナーありません。すみません。

第１４話　救出

Ｓｉｄｅ星也

僕たちは保健室に戻ると安雄君を寝かせました。すると出木杉君が入ってきました。

出木杉「ドラえもん！無事だったんだね。」

ドラえもん「出木杉君こそ無事で何よりだよ。」

出木杉君とドラえもんさんはどうやら認識があるみたいでお互いの無事を確認すると安堵の表情を見せていました。

ピリリリリ…

突然誰かのケータイが鳴りました。かかってきた人は…

のび太「もしもし？」

のび太君のようです。

聖奈「もしもし？聖奈です。」

のび太「聖奈さん！？無事だったんですね。」

どうやら聖奈さんからかかってきたようです。

聖奈「私と咲夜さんは大丈夫なんですが……静香ちゃんが足をくじいてしまって…それに外にゾンビがたくさんいるんです。」

のび太「静香ちゃんが！？」

……もうこうしてはいられません。僕はのび太君からケータイを取りました。

「……場所はどこですか？」

聖奈「えっと……学校の裏庭の倉庫です。」

「今から助けに行きます。そこに隠れていてください。」

聖奈「えっ…しかし……」

僕はそこで通話を切りました。そして、のび太君にケータイを返し助けに行こうとしました。

出木杉「1人で行くんですか！？」

「はい。それがどうかしましたか？」

出木杉「無茶です！いくら星也さんが強くても大勢のゾンビを1人で相手をするなんて…。」

のび太「僕もついていきますよ。」

僕を心配してくれているんですね。ありがたいけど…。

「いいえ。僕1人で行きます。おそらく安雄君に大怪我を負わせたカメレオンが理科室にいると思います。だからのび太君たちはカメレオン討伐を頼みます。」

ドラえもん「じゃあ僕が星也さんに…」

「それも駄目です。保健室にドラえもんさんがいなくなったら安雄君は誰が見るんですか？君たちがなんと言いましても僕は行きます。困っている人を助けたいんです。」

僕はそう言い切るが…

ドラえもん「でも1人は危ない。せめて2人なら…？「その心配はいらない。俺も一緒に行くからな。」！？」

ドラえもんさんの言うことを遮るかのように誰かがそう言っいました。誰でしょうか？

龍輝「久しぶりだな。星也。」

「龍輝！」

僕は龍輝を見て驚きました。まさか、龍輝もこちらの世界にくるとは…。

出木杉「ええと……そちらの方は？」

龍輝「俺は高岸龍輝だ。今日ここに引っ越してきてこの状況に巻き込まれた。」

一応別の世界にいるとは分かっているみたいです。

出木杉「よく生きていましたね。」

のび太「両手に持っているそれは…ショットガンですか？なぜ２つも…。」

龍輝「そりゃあ２つ使うからだよ。」

「相変わらず人間離れしていますね。ショットガンを片手で打てる人なんていませんよ。」

龍輝「てめぇの身体能力も人間離れしているだろ。」

いや、身体能力が人間離れしていると言われましても扉を蹴破るくらいですよ。まだ常人です。…え？常人じゃない？気にしたら負けです。

秀人「話しを戻すぞ。一体なにがあった？」

あっ！そうでした。早く助けに行かなければ…。

「咲夜さんたちがゾンビのせいで身動きがとれない状況なんですよ。僕は今助けに行こうとしていました。」

秀人「（ここで華麗に助ければ咲夜さんはわたしに惚れるはず…。これは絶好の機会じゃないか。）待て星也。わたしも行く。咲夜さんのた……星也１人で行くのはさすがに危ないからな。」

秀人、気持ちはうれしいですが下心見え見えですよ。

美琴「私も行きます。もし、あっちで怪我人が出たしたら応急処置をします。」

えらいですね。美琴さんは。常に他人のことを考えています。秀人も少しは見習ってもらいたいものです。

龍輝「俺も忘れるな。俺がいないと全てが始まらねーだろ。」

やっぱり龍輝は自信に満ちあふれています。その自信に満ちあふれた行動に僕は何回救われたでしょうか。

「美琴さん、秀人、そして龍輝。ありがとうございます。」

僕はいい友人を持ちました。この友人関係がいつまでも続くとよかったんですが…。

ドラえもん「4人なら大丈夫だね。救出してきてね。」

「のび太。カメレオン討伐はみんなでやるんですよ。決して1人でやってはなりません。」

のび太「分かりました。」

僕はそう言うと学校の裏庭まで走っていった。

～学校の裏庭～

うわあ……ゾンビがたくさんいますね。７０体くらいでしょうか。

「これじゃあ討伐する数が割り切れませんね。」

龍輝「割り切る？なに言ってんだ？お前。やったもん勝ちに決まっているだろう。」

秀人「そういうことだ。お先に行くぜ。」

秀人は右手にハンドガン〔レッド９〕、左手にライフル〔ＳＲＳライフル〕を構えて攻めていきました。次に龍輝は両手にハードサポーターをつけて、さらにその両手にはショットガン〔スパス１２〕が右手、左手に１つずつ握られていました。僕は両手にチャクラムを持っています。美琴さんは後ろで九火のコンと協力してなにかしています。最初に攻めた秀人はライフルとハンドガンを駆使してゾンビの頭を撃ち抜いています。龍輝は基本空手や八極拳などの武術を組み合わせた竜神拳法を使いゾンビたちを駆逐しています。時々両手に持っているショットガンを撃って一気に倒していました。僕はチャクラムを投げてゾンビたちの首やら足などをぶったぎっています。チャクラムが返ってくるあいだにハンドガン〔ブラックテイル〕を殺り損ねたゾンビに撃ってとりこぼしのないように倒していきました。そして、残り２０体くらいになったところで…

美琴「みんな！焼かれたくなかったら下がって。」

美琴さんが忠告してきたので僕たちは素直にゾンビのいるところから離れました。僕たちが離れてから数秒後、ゾンビたちは全て九火のコンによって焼かれました。

秀人「全く……えげつない技だぜ。「９つの大火」。」

また秀人が中二病くさい技名を…。ちなみに今の美琴さんの技は九火のコンと話して場所を指定します。そして美琴さんがきまった呪術を唱えると技が発動します。発動すると指定した場所から炎があがりその範囲内にいるものは火だるまになってしまいます。ちなみに指定した場所になにもない場合は技は発動しません。技の発動が約９秒なので秀人は「９つの大火」と表現しましたみたいです。

龍輝「お前ら何体倒した？」

秀人「わたしは１５体くらい。」

龍輝「勝ったな。俺は１７体。」

「僕は１８体でした。しかし、１位は美琴さんです。」

美琴さんは九火を召還するとかなり強いですから。

美琴「そんなことで争わないの！怪物倒ししてるわけじゃないでしょう。」

……お、怒られました。確かに美琴さんの言う通りです。

美琴「それじゃあ咲夜さんたちを助け出しましょう。」

美琴さんが率先して言いました。そして、倉庫を開けたら咲夜さんたちがいました。

秀人「咲夜さん！無事だった？」

咲夜「私は平気だけど……静香ちゃんが…。」

美琴「話しは聞いています。足首を見せてください。」

みなさん安堵の表情をうかべています。僕もホッとしています。

龍輝「そっちの2人はホントに大丈夫か？」

聖奈「はい。大丈夫です。」

バッキューン

咲夜「……／／／」

美琴・静香・聖奈「「「ストライク！？」」」

秀人「龍輝いいいいい！貴様あぁぁぁぁぁ！」

龍輝「そっちの人は？」

咲夜「……だ、大丈夫です。」

あれ？咲夜さんの顔が赤くなっています。風邪でしょうか？秀人はなぜだかキレていますし、龍輝は頭にクエスチョンマークがついています。……なんですか？この状況は？さっきのゾンビのときよりカオスのような気がします。とりあえず、静香さんの応急処置が終わるまで外にいますか。

第１４話　救出（後書き）

星也は他人の恋愛関係にも鈍いです。龍輝は星也ほど鈍くありません。

第１５話　誰かの為に（前書き）

もう少しで学校編が終了します。バイオゲラス戦のあとにオリジナルストーリーを入れます。

第15話　誰かの為に

Side星也

僕たちは咲夜さんたちを助けて保健室へ向かっている途中です。僕としては早く保健室について欲しいです。なぜなら……

龍輝「はぁ………。」

秀人「死ね…」

咲夜「……／／／」

静香・聖奈「あはは…。」

こんなカオスな空気が続いているのです。龍輝はなぜかため息をつき、秀人は壊れたかのように死ねをなにかの呪文みたいに連呼して、咲夜さんはなぜか顔が赤く、静香さんと聖奈さんは苦笑いをしていました。なんか…嫌です。この空気。黙ると秀人の死ねしか聞こえてきません。それにしても……いつ話しましょうか？自分のことについて…

美琴「なんでそんな難しい顔してるの？」

そんな考え事をしていると美琴さんが話しかけてきました。

「え、いや、少し考え事を…。」

僕はそう答えました。

美琴「大丈夫？起きたときからなんか……違うよ。いつもの星也君じゃないみたい…。」

「え！？そうですか？」

美琴「笑わなくなったと思うんだけど…。」

そうでしょうか。……そうですね。やっぱり自分の正体についてどこかで引っかかっているのでしょうか。どこかで…。

聖奈「みなさん保健室につきましたよ。」

どうやら保健室についたようです。いつの間にか秀人の死ねの連呼をやめていました。この事はまた後でじっくり考えるとしましょうか。僕たちは保健室に入っていきました。保健室には白峰君とスネ夫君以外全員いました。

秀人「……怪我人増えてない？」

秀人がそう思うのも無理はないでしょう。安雄君に加え出木杉君、のび太君と怪我をしていました。

静香「なにがあったんですか？」

出木杉「僕はカメレオンとの戦闘中に怪我をしました。」

のび太「僕は…1人で挑んで……怪我をしました。白峰さんたちが助けに来てくれたので助かりました。」

……なに考えてるんですか。僕はのび太君のほうへ歩いていきました。

スパァンッ

「1人で行くなって言っただろ！！」

Ｓｉｄｅ美琴

星也「1人で行くなって言っただろ！！」

お、怒った…。あの星也君が…。いつも優しく冷静な彼が怒った。私は驚きを隠しきれなかった。私だけでなく他の人たちもすごく驚いていた。

星也「……もし、死んでたら…どうするのですか。」

でも、やっぱり他人思いなんだ。星也君怒ったところ初めて見た。

Ｓｉｄｅ星也

久々に怒りましたよ。死んだら悲しむ人がいるはずなのに…。

のび太「星也さんこそなんでも1人でやろうとしてるじゃないですか。死ぬのが怖くないんですか？」

死ぬのが怖くない…ですか。考えたことありません。

星也「僕が死んでも誰も悲しみませんよ。だから怖くありま

バチンッ

！！！？」

怖くないと言いかけたときに誰かにビンタされました。やったのは

……美琴さんでした。

美琴「ふざけないで！誰も悲しまないって簡単に言わないでよ！少

なくとも星也君が死んだら私は……悲しいわ。」

美琴さん…

秀人「星也。今のはお前が悪い。たとえ誰も悲しまなかったとして

も命を投げ出す言い方はするな。某格闘漫画に出てくる北斗神拳継

承者の1人も「命は投げ捨てるものではない」って言っていたしな。

」

秀人…

龍輝「俺は別に死ぬなって言わねーよ。お前の自由だから好きにす

ればいい。ただ、お前にも死んだら悲しむやつがいるってのを忘れ

るなよ。俺はお前とずっと親友でいたい。」

龍輝…

美琴「もっとみんなを頼ってもいいんだよ。」

……もし、僕の正体を知ったら同じようなことを言えるので

しょうか。ずっとこのまま親友でいられるといいです。

聖奈「あのー…1つよろしいですか？」

一同「？」

聖奈「その青いかたは…中に誰が乗っているのですか？」

ドラえもん「……！！」

いや…聖奈さん、いくらなんでもそれはないですよ。

咲夜「なんか……妙にかわいいわ。」

龍輝「意外とかわいいな。」

2人ともかわいいって……まあ、かわいいですね。

ジャイアン「そうだった。聖奈さんたちはドラえもんにまだ会ったことがなかったよな。そいつはドラえもん。いろいろあってのび太をお守りしているロボットだ。」

聖奈「ロ、ロボット！？」

まあ、普通はそういう反応になりますよね。

出木杉「22世紀からきた猫型ロボットさ。今の科学力じゃ考えられないことだよ。」

咲夜「ね、猫型…？」

聖奈「どこにも……耳なんて…。」

のび太「わー！！それは言っちゃ駄目！！！」

聖奈さん。ドラえもんさんの地雷を普通に踏みましたよ。ほら、ドラえもんさんが今にも人を殺すような顔つきになってるじゃないですか。

聖奈「え！？ご、ごめんなさい。」

ドラえもん「いいよ……ハハハ……気にしてなんかないさ。」

ドラえもんさんは哀愁漂わせながら答えました。

のび太「とりあえずドラえもんは僕たちの仲間だ。ちょっと抜けたところがあるけど頼りになるよ。」

ドラえもん「それのび太くんに言われたくないよ。……よろしくね、聖奈さん。」

のび太君の言ったことに対してドラえもんさんはつっこみ聖奈さんによろしくと言いました。

聖奈「こちらこそ……よろしくお願いします。」

聖奈さんはそう言うもののまだ少し混乱しているようでした。するとスネ夫君が血相を変えて帰ってきました。

スネ夫「大変だ！ジャイアン！みんな！まずいことになったよ。」

ジャイアン「どうした？スネ夫。なにがあった？」

スネ夫「凄い数のゾンビがこっちに向かってきているよ！あの数は１００体を軽く越しているよ！しかも5分もかからないうちに校門に来るよ！」

一同「！！！！！！！！！！」

スネ夫「それだけじゃない！裏庭にあのでかいカメレオンがいるんだよ！あいつ居座るつもりだよ。」

静香「そんな…」

出木杉「どうすれば…」

安雄「逃げ場がない…」

まずいです。このままじゃやられてしまいます。

「みなさん。落ち着いて下さい。あわててもなんの解決にもなりません。まず、女性の方々は必要物資をジャイアン君たちが持ってきたかばんなどに詰めて出れる準備をしてください。」

咲夜「分かったわ。」

美琴「任せて。」

聖奈「はい。」

静香「分かりました。」

「次に校門でゾンビを倒す班とカメレオン討伐班の２つに分けます。ゾンビを倒す班には僕が行きます。」

僕がそう言うとみんなは落ち着きが戻ってきました。

秀人「じゃあわたしはカメレオン討伐へ行こうではないか。」

龍輝「俺は星也と同じゾンビのほうに行くぜ。」

秀人と龍輝も決めたようです。あれ？しかし…

「そういえば、パスコードの件はどうなっていますか？」

出木杉「全部集まりました。」

「ならば出木杉君は裏口のロックの解除を任せます。安雄君は出木杉君の護衛をお願いします。」

出木杉「分かりました。やってみます。」

安雄「ちぇ。護衛か…」

安雄君少し不満気ですね。なら…

「龍輝。１番かっこいい男ってどんな男だと思います？」

龍輝「そりゃあ仲間を守る男だろ。」

「ですよねー。安雄君は不満そうだから別の人にでも

安雄「やります！」

じゃあお願いします。」

ジャイアン（星也さん上手いな。）

よし。だいぶ役割が固まってきました。あとは…

「君たちはどうしますか？」

スネ夫「僕は咲夜さんたちといっしょに…あべしッ！」

ジャイアン「俺たちはゾンビのほうに行くぜ。」

ジャイアン君はスネ夫君の腹を殴り言いました。スネ夫君…少し秀人の考えが入ってきました。

「ドラえもんさんとのび太君はどうしますか？」

ドラえもん「僕はのび太君と同じところに行くよ。」

のび太「……僕はカメレオンのほうに行きます。そろそろ決着つけたいですし。」

やっぱりですね。ある程度は予想していました。

「それではみなさん、もう少し頑張りましょう。」

僕はそう言って保健室を出ました。このときには僕はもう決意を固

めていました。この力をみんながいなくとも…1人になろうとも…

……誰かの為に使います！

第15話　誰かの為に（後書き）

星也「みなさん、おなじみの星也の人間観察コーナーのお時間です。今回のゲストはドラえもんさんです。」

ドラえもん「僕ドラえもん。よろしく星也さん。」

星也「では最初の質問です。好きな食べ物は？」

ドラえもん「どら焼き。」

星也「なるほど。確かにどら焼きみたいな顔ですからね。」

ドラえもん「……（怒）」

星也「すみません。冗談です。では次の質問です。最近の悩みは？」

ドラえもん「のび太君が執拗に僕の秘密道具を頼りがちにしていること。」

のび太「ドラえもーーーーーん！」

ドラえもん「すみません。星也さん。」　ドタタタタタ…

星也「……ゲストがいなくなってしまったのでこの辺で。次回までごゆっくり。」

第１６話　疫病神（前書き）

今回はかなり無理やりです。すみません。

第１６話　疫病神

Ｓｉｄｅ星也

僕たちは今校門でゾンビの大群を待ち構えています。

「ジャイアン君、スネ夫君。前線には僕たちが行きます。倒し損ねたゾンビを始末してください。」

龍輝「おっ、お前がやけに協力プレイを心がけているな。さっき姫野に言われたことがそんなに心に響いたか？」

「違います。より確実な方法を言っているだけです。……来ましたよ。ゾンビ。」

うわあ…。確かに数が多いです。まあ、余裕でしょうが。

星也「龍輝。行きますよ。」

龍輝「誰に指示してるんだ？言われなくても分かっている。」

そして、僕と龍輝はゾンビの大群に向かっていった。

Ｓｉｄｅ美琴

校門のほうから銃声が…。始まりましたね。

静香「美琴さん。そこの板チョコとってください。」

「はーい。」

……板チョコって誰が持ってきたのよ。あ、星也君か…。
やっぱり……少し心配ね。星也君たちが強いのは分かっているけど。
……私がここにいていいのかな？私も戦いにいったほうがいいのじゃ…。

咲夜「心配しすぎよ。美琴ちゃん。」

「さ、咲夜さん。どうして…」

咲夜「顔に出てたわよ。」

……私ってそんなに分かりやすい人だっけ？それとも咲夜さんが凄いだけ？

咲夜「美琴ちゃん。彼らを信用してあげて。私だって心配なのよ。でも、彼らはそんな簡単にやられないわ。特にあなたの旦那さんの星也君は。」

「え……だ、旦那さんって…そんな／／／／／」

咲夜さんの言ったことで私は顔を真っ赤にしました。咲夜さん、今のは絶対からかってたよ。咲夜さん隠れSだよ。

咲夜「そんな本気で受け止めなくても…。まあ、私たちにはやるべき事があるでしょう。それからこなしていきましょう。」

……そうですね。その通りですね。ずっと心配していても駄目よね。やるべき事からやっていきましょう。

Ｓｉｄｅ秀人

わたしたちは今カメレオンとそのおまけであるわんわんお（ゾンビ犬）と戦っている。わんわんおはドラえもんと白峰、カメレオンをわたしとのび太というように相手を分担してやっている。しかし、このカメレオンは図体がでかいくせにして動きが速い。さらに姿まで消すからうざいったらありゃしねえ。だから、わたしはカメレオンの目を狙ってスキを作っている。そして、メインは…

秀人「のび太。今です！」

わたしがそう言うとのび太のショットガンが火をふいた。まだそんな大きな変化は見られないがダメージがないってことはないだろう。しかし、あいつの目を撃つのはいいんだがすぐに再生しやがる。どうなってるんだ！？あのカメレオン。

Ｓｉｄｅ龍輝

戦闘開始から5分くらいだろうか。俺と星也の連携プレーで３００体いたであろうゾンビが１００体くらいにまで減っていた。でも、

ジャイアンたちの銃の弾がきれてしまったらしい。じゃあ俺たちだけで…

星也「龍輝。君はカメレオンのほうに行ってください。ジャイアン君たちも弾の補給をしたらカメレオンのほうに行ってください。」

「星也！お前なに言ってんだ！？1人じゃ無茶だ！」

星也「ジャイアン君。保健室で安雄君がいたらこっちに来るように言っておいてください。」

……なるほど。こっちの人員を2人にして、あとはカメレオンに行けってことか。

「……分かった。でも無理するな。」

星也「そんなこと分かっていますよ。」

こいつは分かっていてもやるから怖い。そんな不安を抱き、裏口へ向かうのだった。

Ｓｉｄｅのび太

「秀人さん！」

秀人さんは一瞬のスキをつかれ、カメレオンにふっとばされました。

「しまった！」

僕もスキをつかれ、ショットガンを落としてしまった。もう駄目かと思ったら…

？「うおぉぉぉぉぉぉぉぉ！」

勢いよく開く扉の音と共に出てきたのは安雄だった。

安雄「喰らいやがれーーーーー！」

そう言うと安雄はカメレオンにめがけてグレネードランチャーを連射した。

安雄「これで終わり

？「のび太！」

ぐへっ！」

安雄のトドメを遮るようにジャイアンたちが入ってきた。安雄はジャイアンにふっとばされていた。

のび太「ジャイアン！龍輝さんも！星也さんはどうしたんですか？」

龍輝「今はおそらく1人で戦っている。保健室に出木杉だけがいたからおかしいと思ったらこっちに来ていたか。」

龍輝さんが事情を話してくれました。

秀人「龍輝。カメレオンは誰のおかげか知らんがもう虫の息だ。殺ってしまうぞ。」

龍輝「言われずとも分かっている。」

すると龍輝さんはカメレオンにむかって走り出した。カメレオンの攻撃をかわし跳び蹴りを喰らわせていた。カメレオンはふっとび、壁に衝突した。星也さんといい、本当に人間ですか？次に秀人さんが悶えているカメレオンの目をライフルで正確に撃ち抜く。

スネ夫「のび太！こいつでトドメだ！」

スネ夫はグレネードランチャーを投げてきました。……あれ？安雄のじゃなかった？僕はそんなことおかまいなくグレネードランチャーをカメレオンに向けた。

のび太「これでええぇぇぇぇ！最後だあぁぁぁぁぁ！！」

僕はカメレオンにグレネードランチャーを撃った。カメレオンは首が吹き飛んで絶命した。そのときに咲夜さんたちも来た。

聖奈「……倒したのですか？」

龍輝「ああ。倒したぜ。のび太がな。」

静香「凄い！のび太さん。かっこいいです。」

し、静香ちゃん。おだてないで。照れるから…。

？「へえー。あのバイオゲラスを倒したのね。すごいわー。」

僕たちが喜び合っていると突然女性の声が聞こえた。静香ちゃんたちの声ではない。じゃあ、誰だ？その疑問を頭に浮かべ声のした所をふりむけば１人の見知らぬ女性が立っていた。

龍輝「あ？誰だお前？」

？「あら、年下のくせに無礼ね。まあ、いいわ。名前だけでも言っておくわ。私の名前は才川絢乃…

星也「死ね。」

！！！？ちぃ。」

そこで星也さんが出てきて絢乃と呼ばれる女性に殴りかかっていた。

Ｓｉｄｅ星也

僕はゾンビ１００体を倒して裏口に向かいました。すると僕を除くみんなが集まっていました。しかし、裏口にいる女性は……あいつは！？やっと見つけた！俺はあいつの顔面を殴りかかったがすぐ反応し、惜しくも当たらなかった。しかし、俺はそこから奴の腹を蹴飛ばすとふっとんだ。

のび太「星也さん！」

「みなさん。大丈夫でしたか？」

俺は敬語で聞いた。みんな大丈夫そうなので少し安心した。

「……4年だ。やっと見つけた。」

美琴「……星也君？」

やっぱみんな驚いているな。そりゃそうだ。今の俺の言葉からは怒りが満ちているからな。

絢乃「……星也か。……全く。少しは敬ってほしいものよ。」

「やだね。お前らを敬うなんて…。」

出木杉「星也さん！やはり彼女を知ってるのですか？」

「ああ。奴らは俺の故郷とこの街をこんなことにした張本人の1人だぞ。自分の為なら他人の犠牲をいとわない最低な連中だ。」

絢乃「最低？いいえ、私たちは世界を正しい方向に向けようとしているだけよ。」

「お前らにとってだろ。正しいっつうけど結局はあんたらの都合良くしたいだけだろ。」

絢乃「うるさいわね。疫病神のくせに正義を否定するな。」

秀人「疫病神！？どうして星也が！？」

絢乃「どうしてってあの「黒いクリスマス」が引き起こる原因とな

ったのは星也よ。」

星也「……。」

龍輝・美琴・秀人「！！！！！？？？」

他の人「？」

…ちっ。あいつ余計なことを…。まあ、事実だけどな。

絢乃「星也があるものを持っていなかったら、「黒いクリスマス」なんて起こらなかったのに…。」

美琴「星也君！本当なの？」

「……本当だ。」

秀人「そんな…。」

もう駄目だな。また俺は1人になるな。それでも…

「確かに「黒いクリスマス」が引き起こる原因となったのは俺だ。俺があんな刀を持ってなければ多くの人は死ななかった。でもな…お前らはその「黒いクリスマス」と同じことをやっているぞ。自分の欲望や望みのために他人を犠牲にしている。それなのに俺とどっちがタチが悪いなんか比べるのはどんぐりの背比べだろ。別に罪滅ぼししるとは言わねーよ。でもな、親友を殺したお前らとじいちゃんを殺した滅隗だけは絶対に許さねー！」

もう1人になってもいい。どうなってでもいい。絶対に殺す。

絢乃「ふーん…。別にそう考えてもらって結構だけど……あなた1人で何ができる…

？「いいや。星也は1人じゃねー。俺がいる。」

！？」

そう言って俺の横に黒いフードをかぶった男が現れた。

絢乃「……あなたは誰？」

奴が言うと男はフードをとった。フードをとると俺がよく知っている赤い髪がツンツンに立っている男がいた。まさか…

？「俺の名前はリア。記憶したか？」

彼はリアと名乗っていたが俺の親友のアクセルそのものだった。

第１６話　疫病神（後書き）

ＮＧ集　その３
～才川絢乃登場より～

龍輝「あ？お前誰だ？」

絢乃「あら、年下のくせに無礼…

秀人「ごちゃごちゃとうるせー！！」

ぎゃあああぁぁぁぁぁ…」

秀人「誰が無礼だ！紳士にむかって失礼だぞお前！」
　ドカッ　ベキッ　ドゴッ…
秀人「ふう、スッキリした。」

龍輝「おい、そいつ明らかにお前のこと言ってないぞ。」

秀人「え……マジか…すまっせーん。」

龍輝「それが紳士の謝り方か？」

絢乃「ホント無礼ね。」

龍輝「あれだけ殴られて立つのかよ！もう賞賛に値するぞ。」

絢乃「私の名前は…

星也「天誅ーーーーーー！」

ドキャッ

ぎゃあああぁぁぁぁぁ…」

龍輝「また！？」

秀人「あの人災難すぎるだろ。」

絢乃「……もう帰る…。」

星也「流石に折れたか。」

秀人「名前すら言わせてもらえないとは哀れだな。」

龍輝「お前ら2人のせいだろ！！！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9652y/

ドラえもん のび太のバイオハザード　イレギュラーな者たち

2011年12月29日17時47分発行